

音ノ木坂学院 生徒会議事録

関崎比呂

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「今日が最後だから……改めて話そうと思うんだ。彼女たちの奇跡の物語を」

音ノ木坂学院三年、篁昂（たかむら すばる）。

彼はやる気なし、モチベーションゼロの生徒会書記である。

そんな彼は生徒会の仲間である綾瀬絵里、東條希を支えるためにスクールアイドルプロジェクトに関わっていくことになる。

これは、彼が纏めた議事録に基づいた回想の物語――。

※シリアスもありますが基本的にギャグ多めです。恋愛要素もあります。

※絵里、希＋1名がメインヒロインとなりますが、ほかのキャラクターとの絡みもしっかり書きます。

※基本的にはアニメ版に沿って話を展開しますが、オリジナルの話も挟んでいくのでご了承ください。

※二次創作に伴い、一部設定を変更しております。そういったものが苦手な方はご注意ください。特に共学設定が苦手な方など。

目次

序幕

議題0 音ノ木坂学院、生徒会役員

1

第一幕【奇跡の少女たち】

議題1 音ノ木坂学院の廃校

14

議題2 新たな風

31

序幕

議題0 音ノ木坂学院、生徒会役員

「——以上、これを最後の議事録として記す。三月一日、音ノ木坂学院
前生徒会書記・たかむらすばる 篁 昂……つと」
カタカタとキーボードを打ち込み、Enterキーを静かに押下す
る。

そして……保存。

「——終わり、か」

長々と纏めてきた議事録も今日で終わり……。

俺はノートパソコンを閉じる。

それと同時に、俺の頭の中に様々な思い出が過る。

俺の三年間の高校生活。

友人たちとの生活。

生徒会書記として活動していた日々。

そしてなにより——。

彼女たちと過ごした……奇跡の時間。

そのすべてがまるで昨日起こった出来事かのように鮮明に思い出
される。

「充実した……よなあ」

俺は椅子の背もたれにダラつと寄りかかる。

——楽しかった。

入学した当時は程々の高校生活を送るものだと思っていた。
程々に通学して、程々に友達を作って、程々に遊んで……。
程々に勉強して運動して、程々に卒業して……。なんて。
そんな程々な予想。

しかし今、振り返ってみれば程々なんてものではなく——。

とても……充実したと言える高校生活だった。

「それも……今日で終わりか」

生徒会室に一人座る俺は、窓の外を眺める。

外では桜の花が舞い散り、桃色一色の景色が今日というめでたい日を祝っていた。

今日は……三月一日。

——卒業式。

俺たち三年生は今日……卒業する。

同級生たちは校庭や教室で高校最後の時間を名残惜しみながら過ごすのだろう。

俺は……というと。

「……やっぱ、懐かしいな。ここは」

生徒会室を見回す。

この学院で思い出深い場所は沢山ある。

教室はもちろん、中庭だったり……部室だったり。

沢山あるけれど……やはり俺は、この生徒会室が思い出深かった。

始めは半ば強制的にやらされた生徒会だったけど……。

今思えば、生徒会に入って良かったと強く思う。

なぜならば。

生徒会に入ったおかげで、俺は彼女たちと出会えたのだから——。

「彼女たち……か」

廃校の危機に瀕していたこの音ノ木坂学院を救った九人の女性生徒。

この学院に……いや、日本中に奇跡を巻き起こした九人の女神。

俺は……そんな奇跡を目の前で見してきた。

例え彼女たちが全員この学院から卒業して、いつしか忘れられてしまっても。

この学院から彼女たちが残した奇跡の証明が無くなってしまっても……。

俺だけは……決して忘れない。

彼女たちと過ごした……この奇跡の一年間を。

「……よし」

俺は椅子にしっかりと座り直し、テーブルに置いているノートパソコンを再び開き、一つのファイルをダブルクリック。

ファイル名は――。

『音ノ木坂学院 生徒会議事録』

そこには、俺がこの一年、学院で経験したすべてのことを記している。

俺は最初のページを開き、一度深く深呼吸をした。

今日が最後だからこそ……改めて全部話そうと思う。

俺、箕昴の物語を――。

そして。

彼女たちが――。

μ、sが残した……奇跡の物語を。

#

『本日の議題：部活動の予算について。』

部活動として相応しくないもの、あるいはしつかり活動しているかどうか怪しいものなど、細かい部分を見れば考えるべき部分は多くある。

そういった部分の予算は削減するべきなのではないか？

削減した分を他の部活動に回すべきなのではないか？

会長：生徒会役員として一つ一つ部活動を回り改めてチェックするべき。

副会長：それも一つの方法としてはアリだが、時間がかかるし確実性も欠けるかもしれない。

会長：活動報告書のようなものを求めても嘘を書く可能性はある。

副会長：まずはその方法で試してみて、上手くいかないようなら直接出向いても良いのではないか。

生徒会役員：各部活動の部長を集めて会議は？

会長：それもアリ。

……。

いかん。眠くなってきた。キーボード打つ手が止まってしまった。なんだこの退屈な時間は。

この感じだと会議が長引きそうだ。面倒くさい。

……あ、やばい。会長と目があつた。欠伸したのバレた。めっちゃ

睨まれた。

黙っていればめっちゃめっちゃ美人なんだけどなああの人。

実際は怖いし……怖いし、恐ろしいし……。

うわ、またこっち見てきた。絶対俺が失礼なこと考えているのバレたわ。

どうせ会議の後怒られるんだろうなあ……などと思いつつ、本日の議事録としよう。

結論：生徒会長は怖い。

議事録担当：篁昂』

#

——会議後。

音ノ木坂学院生徒会長、あやせえり 絢瀬絵里は俺の議事録を読み上げた。

うーむ……俺の議事録レベルもまだまだだな。どうすればもつと意識高い系みたいな文章を書きあげられるのだろうか。

あれか？ 横文字とか沢山使えばいいのだろうか？

えつと……アジェンダがレジユメでパーフェクトなリスケを……。

うん、全然意味分かん。

さては、俺のレベルをもつと高めてくれるアドバイスのために俺は今会長の前に立たされているのだろうか。

さすが我らが会長、優しい。

「……はあ」

うん、違うよね。知ってた。

会長は俺の議事録と読み上げると同時に盛大な溜息をついた。

「……篁君」

「なんでしよう会長」

「なぜあなたはいつもぶざけた議事録を提出するのよー！」

会長は手に持っていたノートパソコンを俺に向ける。

まあまあ、そんなに怒るとその美しい顔が台無しですよ会長。

絢瀬絵里はロシア人のクォーターのようで、綺麗な金髪に女子としては長身、スタイル抜群とそれはもう日本人離れの容姿をしている。

しかしその実態は鬼、悪魔、鉄の生徒会長。特に俺にめっちゃ厳し

いし。

なんなの？ 俺のこと好きなの？

「……気持ち悪い」

「ちよつと、勝手に人の思考を読んで勝手にドン引きするのやめてもらいますっ。」

「真面目に聞きなさい」

「はいごめんなさい」

ギロリと睨まれたことで俺の背筋が伸びた。

……マジで怖いこの人。

怖くて目を合わせられない俺は会長から目を逸らして言い訳タイムを始める。

「いやほら、今日の会議いつもより雰囲気为重めだったので……。せめて議事録で癒しを……と思ひまして……ね？」

「……は？」

こわっ。

会長は不機嫌そうに指先でテーブルをトントンと叩く。

「あなた、いつから生徒会にいるのかしら？」

「……去年からです」

「役職は？」

「ずつと書記ですね、はい」

「だったら……どうしてまともな議事録を一度もあげてこないのよ！

それに最後の方はただの私に対する悪口じゃない！」

「なんなんですか!? 俺が悪いんですか!? もうやってられませんよ

！ 帰らせていただきます！」

「その逆ギレした振りをして帰ろうとするのやめなさい！」

会長は踵を返そうとした俺の腕を掴む。

やべえバレてた。さすがは会長。欺けないぜ。

俺の秘技、逆ギレすればどきどきに紛れて帰れるんじゃないか作戦が失敗するとは……。

反省する気ゼロの俺と、そんな俺に呆れて再び大きなため息をつく会長。

なんかもう……俺絶対この人に嫌われてるよね。それだけは分かるわ。

「まあまあエリチ」

この状況から逃げ出す手段を考えていると、救いの手が差し伸べられる。

生徒会室に残っている最後の一人で、会長の隣に座っていた女子生徒が口を開く。

生徒会副会長、とうじょうのぞみ東條希

紫がかつた長い髪を首の後ろで二つに束ね、大人っぽい雰囲気を出す女子。

特にその……具体的にどことは言わないが二つの夢と希望が発育の良さを証明していた。

いや、別にどことか言っていないからね？ 変態じゃないからね？

昴君は清純派だから。

「……篁くん、どこ見てるん？」

エセ関西弁を話し、ジトつと俺を見る東條。

俺はかっこつけるようにして前髪をかきあげる。

「幸せな未来を……夢見ていた」

「はいはい、そういうのは大丈夫やで」

「……うす」

華麗にスルーである。

生徒会の仲間……俺がどういう人間かよく分かってやがる。

東條は俺から視線を外し会長へと目を向ける。

「篁くん、いつも会議後に改めてちゃんとした議事録をあげてくれるやん？ なんだかんだで仕事はちゃんとやってくれるの分かってるやろ？」

「そうそう。さすがは東條！ いつもありがと——」

「そうやってすぐ調子に乗らないの」

東條は俺を見てビシツと指差す。

「はいごめんなさい」

うーむ……なんか俺……この二人にはいつも謝ってばかりではな

いか？

気のせい……ということにしておこう。うん。

会長は東條の言葉にまだ反論したそうではあったが、「まったく……」と口を閉じた。

そしてその視線が再度俺へと向く。

「それより篁君」

「なんでしよう」

「凄く今更なのだけど……」

会長は俺と東條を交互に見る。

一体どうしたのだろうか？

「どうして希には普通に接するのに……私には敬語なのかしら？」

「あー……」

本当に今更だな。

俺と会長の付き合いも結構長いぞ？

「私たち同じ三年生よね？ ましてや私とあなたは同じクラスよね？」

「俺の記憶が正しければそうなりますね」

「なのはどうして敬語なのよ」

会長は少し不機嫌そうに言った。

確かに会長の言う通り、俺と会長、そして東條は皆同じ三年生である。

そして俺と会長に関してはクラスも一緒である。

東條に対しては普通にタメ口なのに対して、会長には敬語。

それに対しては会長の疑問もごもつともだろう。

そんな俺たちの会話を聞いて東條がニヤリと笑った。

「エリチは篁くんから距離が置かれているみたいで寂しいんやねえ？」

「えっ!? ちょ、ちよつと希なに変なことを——!」

へえ？

俺も東條と同様にニヤリと笑う。

「なんですか会長——！ 初めからそういつてくれれば良かったのに。」

まったくもう、かわいい——」

「はっ。」

「ちよつと反応違いすぎませんか!? どうして俺が言ったら真顔になるんですか!」

東條が言ったら少し焦った感じだったのに、俺が言ったら真顔である。

「というかその『は?』って言うのやめて。本当に怖いから。」

「いや……まあ、アレですよ。なんか会長に対しては敬語がしつくりくるんですよ」

「しつくりって……どういうことよ?」

「しつくりはしつくりですよ。別に会長が嫌いだからとか、会長と距離を置きたいから……とかそういう理由じゃないんで」

「よく分からないわね……。まあもう今更だから別にいいけれど……」

本当はちゃんとした理由があるのだが……正直今は言えない。恥ずかしいし……色々あるのだ。

「とりあえず今は会長も納得してくれたし良しとしよう。」

「ふふっ、よかったね? エリチ」

「もう……茶化さないで希」

普段はクールで近寄りがたい雰囲気マックスの会長だけど、東條に對して柔らかくなる。

「さすがは親友同士……と言ったところだろうか。」

「美少女同士の絡み……うむ、尊い。」

「なんて考えていると——。」

「さて……と」

「パン、と手を打つ会長。」

その音で俺と東條の視線が会長へと向いた。

「そろそろ帰りましょうか」

壁に掛けられている時計を見て時刻を確認する。

「おお……話し込んでいたから全然気が付かなかった。」

「そろそろ帰る時間だな。」

俺たちは会長の言葉に頷いた。

#

「それにしても……」

俺たち三人は教室に戻るために廊下を歩いていった。

同じクラスだから俺と会長は一緒に、東條は隣のクラスだから結局皆道は一緒である。

真ん中に東條、左右に俺と会長という並びで歩いていた。

現在は放課後ということもあり校内に残っている生徒は少ない。

勉強をするために残っていたり、文化部だから残っていたりと……どちらにしても校内の生徒は少数である。

——とはいったものの。

「改めて……生徒数が少なくなったって感じるよなあ」

歩きながら俺は言った。

「……そうね」

「……うん」

二人も寂しそうに頷く。

ここ、音乃木坂高学院はここ数年生徒数の減少に悩まされている。

俺が入学したころにはもう減少が進んでいたようで、俺たち三年生は三クラス。

二年生は二クラス。そして……今年入学してきた一年生に至っては……一クラスしかないのだ。

そのクラス数が生徒数の減少をなによりも証拠づけている。

一年生のころは活気があった校内も……気が付けば寂しい雰囲気へと変化していた。

仕方のないことなのだが……やはり改めて思うと寂しく感じるものである。

「なんとかならないものかね」

「……なんとかしたいわよ私も」

悔しさを感じる会長の呟き。

会長はこの学院が大好きなのだ。

だからこそ生徒会長になって、この学院をより良くするために日々

努力をしている。

しかし……それが良い結果につながっているのかと言えば……正直なんとも言えないだろう。

去年から生徒を増やすためになにかできることを考えていたが……所詮一生徒の俺たちには限界がある。

結局大したことはできずに、現状に繋がってしまったているのだ。

「どうやったら生徒が増えるんやろうねえ……」

「やっぱりここは学院一のイケメンである俺が——」

「それはない」

「……」

まったく同じタイミングで俺の言葉を遮る二人。

ここ、音ノ木坂学院は共学ではあるものの男女の比率に偏りがある。

分かりやすく言えば、男子二割の女子八割……といったところだろうか。

圧倒的に女子が多いということは男子生の母数が少ない。

特にクラス数が少ない一、二年生には男子がそれはもう絶望的に少ない。合わせて数えるくらいしかないのではないだろうか。

と、いうことはつまり——。

俺が学院ナンバーワンのイケメンになれる日もそう遠くないということだな！

……え、違うって？ うん違うね。

「まあ……とりあえず、現状を維持しつつ上手いことをやっていくしかないな。焦っても仕方ないだろう」

「そう……なのかしら」

「学院を救うヒーローが現れてくれたら面白いんやけどね」

冗談っぽく笑う東條。

しかし会長は俺たち違ってその表情は曇っていた。

会長は俺たち以上に、生徒数減少について深刻に受け止めている。

言い出したのは俺ではあるが……この話題を出さないほうが良かったかもしれないな。

それを察した東條が、冗談っぽく茶化すことで話題を変えようとしてくれたのだろう。

さすがは東條だな。

だったら俺も便乗して――。

「ふつ、やはりこの女子人気ナンバーワンのこの俺が――」

『……』

「……。な、ナンバーワンのこの俺が……」

『……』

無視！

これは芸術的な素晴らしい無視である。

ここまで綺麗な無視はなかなか見ないだろう。

美少女二人に無視されるといふ悲しさからその場に立ち尽くす俺。

しかし二人はそんな俺を気にせず、スタスタと歩いて行った。

「……まったく、もう」

俺が付いて来ないことにため息をつく会長。

二人は足を止めると、同時に俺へと振り向いた。

「早くしなさい。置いていくわよ？」

「ほら、行こう？ 篁くん？」

会長は呆れ顔で。

東條は笑顔で。

二人は俺が追い付くのを待っていた。

廊下に差し込む夕日が、彼女たちをより魅力的に映し出す。

「……おう」

俺は小さく笑い再び歩き出す。

先ほどは人気ナンバーワンなんて冗談を言ったけれど――。

この学院の美少女トップツ―は――。

誰よりも魅力的な二人は――。

「間違いなく……お前らだよ」

誰よりも真面目で、誰よりも学院が大好きで――。

誰よりも優しく、誰よりも周りをよく見ている――。

そんな二人とこうして同じ時間を過ごすことが……。

いつしか俺の中で、とても心地の良い楽しいものへと変わっていった。

「なにか言ったかしら？」

俺にはめちやくちや厳しいけど……！

もう少しだけ優しくしてほしいけど……！

でも……まあ、それが俺たちらしいといえはらしい……か。

「いえ、なにも言ってますんよ！ さあ行きますか！」

俺たちは三人並んで歩きだす。

容姿端麗頭脳明晰。生徒会長、綾瀬絵里。

正にみんなのママ。副会長、東條希。

やる気ゼロモチベゼロの問題児。書記、篁昴。

そんな……生徒会三年生組。

後にこの学院に最大の危機が訪れることなど知らずに——。彼女たちが日本中に最高の奇跡を巻き起こすことなど知らずに——。

俺は、俺たちは……今日も生徒会として活動する。

#

『——いうわけで、今日もいつもと同じ生徒会活動だった。』

それにしても会長がタメ口か敬語かなんて気にしていたなんて、正直意外だった。

それも不機嫌そうに言うものだから、案外思っていた以上に引つかかっていたのかもしれない。

会長も可愛らしいところもあるなあ……なんて思った。本人には絶対に言えないけど。

そして、生徒数の減少問題……。

理由はないけど……俺自身よく分からないけど……。

なぜか嫌な予感がするのだ。

もしかして……この感覚が東條がよく言うスピリチュアルパワーというものだろうか？

なんにせよ、俺はなんとなく思った。

もしかしたら今後……俺たちに厳しい試練が訪れるのかもしれない。

い……と。

——確証はないけど。

なんて、匂わせみたいなのを書きつつ、本日の議事録とする。
とにかく明日もまた頑張っていこう』

×月○日

生徒会書記：篁昂』

第一幕【奇跡の少女たち】

議題1 音ノ木坂学院の廃校

春。

俗にいう出会いと別れの季節だ。

様々な期待と希望に胸に新入生たちは入学する。

新たな環境、新たな出会い、新たな感情……。

そんな様々な『初めて』を経験する季節だ。

そして――。

音ノ木坂学院に厳しい試練が言い渡された季節でもある。

あの頃は……色々大変だったなあ。

生徒会としても……一人人としても、特にあの時期は今思い返すだ

けで色々感慨深いものがある。

辛いこともあった。

面倒くさいことも沢山あった。

でも、俺はむしろ学院に転機が訪れて良かったって思っている。

もしあのままにも起きなければ……俺は、彼女たちに出会えな

かったから。

辛くて良かった。

面倒くさくて良かった。

彼女たちに……奇跡に出会えてよかった。

もし彼女たちに出会えなかったら俺は……俺たちは、前に向かって

歩くことができなかつただろう。

#

「ふああ……ねっむ。だっる。帰りてえ……」

朝の定番の三コンビが決まる。

絶対の三コンビって、朝によく言われる言葉トップスリーだと思っ

んだよね。

なんなら朝に関しては『おはよう』とこの三つの言葉で会話できる

と思うんだ。

——なんて、とてつもなくどうでもいいことを考えながら俺は通学路を歩いていた。

そして我らが国立音ノ木坂高校の校門へとたどり着いたとき。

「……ん？」

なにかが……おかしい。

いや、なんかこう……上手くは言えないけどいつもと違う感じがする。

騒がしいというか慌ただしいというか……。

ともかく、そんな感じがするのだ。

なにか校内で事件でも起きたのだろうか？

嫌な胸騒ぎを感じつつ俺は昇降口へと向かう。

そしてふと……昇降口に設置されている掲示板に目がいった。

普段はあまり生徒たちに見られることがないその掲示板。

しかし今日は、掲示板の前に生徒たちが立っていた。

それも……神妙な面持ちで。

「……悪い、ちよつと俺にも見せてくれるか」

上履きへと履き替え、俺も掲示板へと向かう。

そして俺はそこで……驚愕の文字を目にしたのだ。

掲示板に貼られた一枚の紙。

理事長から通達であろうその紙には……こう、書いてあったのだ。

「廃……校……？」

——は？

いや待て待て。

どうということだよ？

廃校ってつまりそのままの意味での廃校で……。

学校が……無くなる？

今すぐというわけではないが、このまま行ったら現在在籍しているすべての生徒が卒業したのちに廃校となるようだ。

張り紙には、来年の入学希望者が定員を下回った場合……と書いている。

今の一、二年生に関しては定員を大きく下回った結果が現在のクラ

ス数だ。

実質これは……廃校決定と言ってもいいかもしれない。

つまり一年生に後輩ができることはない……ということ。

俺はこの学院を心の底から大好きだというわけではないが、当然思い入れはある。

この学院で今まで過ごしてきた日々は……紛れもなく俺の大切な思い出だ。

——待てよ？

この学院が大好き……？

「——会長」

考えるより先に俺の足は動き出していた。

廊下を速足で歩き自分のクラスへと向かう。

廊下では生徒たちが廃校について話していた。

そして。

俺は自分のクラスへとたどり着くと扉をあける。

——いた。

俺は挨拶することなく教室内へと入っていくと、一人の女子生徒の机まで歩いていく。

「……」

その生徒は一人窓から外を眺めていた。

こちらを向いているわけではないからその表情は分からない。

でも……なんとなく想像はできる。

きつと今この人は……。

「会長」

俺はその生徒……絢瀬絵里に話しかける。

会長は俺に呼ばれたことに反応すると、ゆつくりとその顔を俺に向けた。

「笹君……」

元気のない……その声。

その原因など考えるまでもない。

当然、学院の廃校だろう。

俺は会長にかける上手い言葉が見つからず、とりあえず彼女の隣兼自分の席に座った。

俺が座ったのを確認すると会長がぼつりと呟いた。

「あなたも見たわよね……あの張り紙」

「それは……まあもちろん」

会長の質問に頷き俺は言葉を続ける。

「マジか……って感情と、やっぱりなあ……って感情が混ざり合っただけでもないです」

ここ数年悩まされていた生徒数の減少。

もしかしたら……って考えはしていた。でも……どこかでなんとかならうという甘い考えも持っていた。

それが今日……真正面からぶち壊されたのである。

まさかこんないきなり『その時』が来るなんて……誰が予想できたのだろうか。

会長のこの様子を見ると……きつと今日初めて知ったのだろう。

生徒会長だから理事長に教えてもらっていたというわけではなさそうだ。

「思ったより深刻だったわけですね」

「だとしても……いきなりすぎよ」

「……ごもつとも」

ごもつともすぎる。

誰もが予想していなかったこの廃校という事実。

「廃校だなんて……」

会長の顔を見るだけで分かる。

今この人は俺が思っている以上に悩んでいるに違いない。

思い詰めているに違いない。

俺の知っている会長だったら、恐らく廃校を阻止するためになにかできることを探すはずだ。

であれば……俺には一体なにができるのだろうか？

この会長のために俺は……なにができる？ どう動ける？

——そもそも俺は、廃校を阻止したいと心の底から思っているのか

？

「そういえば——」

会長は続けて言葉を発したことで俺は考え事を中断する。

「二年生に…理事長の娘さんがいたわね」

「あ、そうなんですか」

「ええ。というか知らなかったの？」

「その子どもか同級生さえ危ういですよ俺」

「それを自信満々に言うのはどうなのよ……。まああなた友達いないものね」

おうふ……。

気遣いなんて無縁な言葉を言うと、フツと会長は笑った。

この人俺に悪口言うときは良い表情するんだよなあ……。

さつきまでも思い詰めた表情どこに行っただ。

ほんと真性のドSだわ。

「ちよつとストレートな悪口すぎませんか？ もつとこうオブラートに包むとか……」

「じゃあ……友達いるのかしら？」

「いやそれはもう……。ほら、会長とか超友達じゃないですか？」

「あら、それはありがたいわね。嬉しいわ」

「せめて表情と言葉を統一させてくれませんか？ 自分で今真顔って気付いています？」

この人嬉しいとか言っておきながら真顔なんだけど。

というか友達って……。

一体この人はなにを言っているのだろうか？

俺は生徒会の人間だぞ？ 割と目立つ立ち位置だぞ？

そりやもう友達の一人や二人や三人くらい……そのくらい……。
……。

——あれ。

俺、友達いなくね？ 三年間なにしてきたの俺。

「あなたの友達事情はどうでもいいのだけれど……」

「どうでもいいは失礼すぎませんかね」

俺のナイーブな問題をどうでもいいで一蹴しやがった。

会長は俺のツツコミをスルーして言葉が続ける。

「とにかく、昼休みに一度その子に会いに行ってみるわ」

その子……とは、恐らく先ほど話していた理事長の娘さんのことだろう。

それにしても二年生か。

ただでさえ同級生さえまともに話したことある奴が少ないのに、後輩なんてそれ以上に話したことがない。

特別なにか部活をしているというわけでもないし、積極的に色々な生徒と絡むようなタイプでもない。

別に積極的に関わり持ちたいわけではないのだが……。

……俺、こんなだから友達いないんだろうなあ。

まあそれはともかく。

「俺も一緒に行きますよ」

俺の発言に会長は驚いた表情を見せた。

「あなたも？」

「はい。だって会長、コミュニケーション下手だから相手の子威圧しそうですもん。ましてや後輩相手だし」

「威圧ってあなたね……。私をなんだと思っているのよ？」

「そりやもう、鬼——」

「なんですって？」

「いえなんでもありませんもう女神様のような存在ですいつもありがとうございます!!!」

会長から感じた殺気に俺はとっさに頭を下げた。

あぶねえ……あのままいったら俺この世とおさらばしていたわ。

この学院の前に俺自身が廃校になってたわ。

——なにはともあれ。

今の会長はあまり一人にしたくないというのは事実だ。

突然の廃校という事で会長自身少しは混乱しているはずだ。

そんな会長を一人にしてみる。

下手したら理事長の娘さんに詰め寄りかねない。

いや……まあさすがにそんなことはしないだろうけど……。
ともかく、一言で言えば。

心配……なのである。

「東條には俺の方から声をかけておきますよ。昼休みになったら一緒に行ってみましょうか」

「え、ええ。ありがとう」

東條もきつと会長を心配しているはずだ。

とりあえず後で会長の様子だけでも報告しておくでしょう。

俺自身が廃校についてどう思っているなど、後で考えれば良い。

今は今できることに専念するべきだ。

「それにしても……理事長の娘か」

後輩とはいったものの……一体どういう子なのだろうか。

理事長はめっちゃ綺麗な人だからなあ……。THE・大人の女性って感じの人である。

あんな美人の血を引いているんだつたら……。

母親の超絶可愛い子だという可能性も……。

そんな子から『篁先輩!』なんて呼ばれたら――。

――なるほど。

素晴らしいな。

いや待てよ? もしも父親がゴリゴリのマッチョ系の人でそつちの血の方が強かったら?

むむむ……。

「……気持ち悪い」

……。

いや、だからさ……。

「勝手に人の思考を読んで勝手にドン引くのやめてくれる?」

###

昼休み。

「悪いな東條、急に言ったうえに付き合わせちゃって」

「ううん、別に大丈夫。ウチもエリチが心配やったしね」

ガヤガヤとした校内の雰囲気はなんとも昼休みらしい。

俺は教室の外の廊下で、東條と話しながら会長を待っていた。

「それにしても理事長の娘がこの学院にいたなんてな……。会長に聞かされて初めて知ったぞ」

東條にはあらかじめ今朝の一見のことは話している。

やはり親友である会長の様子が心配だったようで、昼休みに理事長の娘さんの会いに行こうと提案した際は二つ返事で了承してくれた。きつと東條も会長のことを放っておけないのだろう。

「篁くん、あまり積極的に人と関わろうとしないもんね」

「東條……お前優しいな」

「えっ……？ えつとウチ……別に褒めたわけじゃないんやけど……」

突然の褒め言葉に東條は困惑した様子で首をかしげた。

「会長と同じ話をした時、あの人『お前友達いないから当然か』って一刀両断したからな」

「あはは……その会話想像できるよ」

「いやもうほんと……怖いわあの人」

溜息交じりの俺の言葉。

しかし、東條は俺を心配するどころか楽しそうに笑っていた。

なんだなんだ？ 人の不幸を笑っているのか？

まったく！ 昴君怒るぞ！

「ふふ、でも篁くん。エリチが心配だから昼休み自分も一緒に行くって言いだしたんやろ？」

「……」

「違う？」

優しく微笑んで俺を見る東條。

やはりこの東條希という少女は……周りをとというか……他人をよく見ている。

誰よりも優しい東條が東條たる所以である。

まったく……。

そういう面に関しては東條に一生勝てそうにないな。

ストレートに言われて恥ずかしくなってきた俺は、東條から目を逸

らし頭をガシガシと搔く。

「……ノーコメントで」

「それはつまり凶星ってことやね。篁くん、その優しさをもっと表に出せばいいのに……」

「……。だーもう！ お前は俺のママか！ 希ママか！」

「篁くんみたいな息子は……ちよっとNGで……」

「まさかのNG出ましたー！」

東條と話すと、会長とは別の意味で疲れる……。

なんかこう……俺の考えていることがすべてバレているような感じがするのだ。

楽しそうに笑う東條を横目に俺は溜息をつく。

「——ごめんなさい、待たせちゃったかしら？」

ふと、俺と東條に声がかかる。

教室でなにか作業をしていた会長がやってきた。

「ううん、大丈夫やで。篁くんとお話してたし」

「んじや、パパつと行きますか。早くしないと昼ご飯を食べる時間なくなっちゃいますし」

「あら、あなた別にご飯食べなくても生きていけるじゃない」

「普通に死にますから。人を人外みたいに言うのやめてくれます？」

邂逅一番さつそくドSのナイフで俺を切り裂く。

この人可愛い笑顔を浮かべて容赦なく切りつけてくるから……。

とはいえ冗談で言っていることなんて当然分かっているから、別に言われていて辛いとかは微塵もないのだけど。

むしろ他の生徒たちから恐れられている絢瀬会長は実はこんな人なんだよって、少しは分かってくれたら嬉しいまである。

「……あれ？ でも待って？」

会長つて俺と一緒にの時だとドSマックスやん。

それを見て他の生徒はどう思う？

——まあ、決まってるよな。

『私も罵つてく!!』と言うに違いない。ドM万歳。

「ふふ、今日も二人は仲良しやね」

俺と会長を見て東條は微笑む。

それに対して会長は大きな溜息をついた。

「そりゃそうよ！ 俺と会長は強い絆で結ばれた最高のパートナー！」

「そうね。糸こんにやくくらい強い絆で結ばれているわね」

「すぐ切れるっつっ!!」

一噛みですぐ切れる！

「もう……。くだらない話をしていないでさっさと行くわよ？ 時間

もないんだから」

「はーい」

二人は並んで歩き出した。

元はと言えば会長の発言がきつかけなんじゃ……？

怖いから絶対そんなこと言えないけど。

「ほら、篁くんも早く行こ？」

東條が振り向いて俺を呼ぶ。

まったくこの二人は……。

「りょーかい」

俺は溜息をついて歩き出す。

とりあえず、理事長の娘さんに会いにいくとしよう。

どんな子なのか……結構楽しみである。

あ、いや、別に変な意味はないからね？

#

場所は変わり中庭。

日が良く差し込み暖かいこの場所で、昼ご飯を食べる生徒は結構多い。

え、俺？

こんなところでご飯食べたらぼっちなのバレちゃうでしょ！ やめて！

くだらないことを考えつつ、俺は生徒たちを見回しながら会長に声をかける。

「それで会長、その子の顔とかがって分かってるんですか？」

「ええ、もちろん」

会長は中庭をキョロキョロと見回し――。

そして……一つの女子三人組グループが視界に入った。

「いた」

会長は短く言うのと、ベンチに座っている女子三人組に向かって歩き出す。

あの子たちが……そうなのだろうか？

たしかにリボンの色的に二年生だけど……。

というか突然先輩に、それも生徒会長に話しかけたら相当驚くよね。

――ドンマイ、後輩。

俺と東條も会長に続き歩いていく。

「ねえ、ちよつといい？」

三人組のもとにたどり着くと同時に、会長は彼女たちに声をかける。

最初は『え……？』って様子で俺たちを見ていた彼女たちだが、会長の顔を見るなり驚いた表情を浮かべた。

そりやそういう反応になるよなあ……。

会長も会長で、ちよつと素っ気ない雰囲気出しすぎでは……？

『は、はい！』

彼女たちは揃ってベンチから立ち上がる。

そして――。

「だ、誰……？」

中央に立つ女子がボソツと聞いていた。

サンドアップの髪型に、大きく綺麗な青の瞳。

その表情や雰囲気から見るからに『元気っ娘』だと分かる。

というか生徒会長の顔を覚えていないのかよ。

「生徒会長ですよ。左右にいる方は、副会長と――」

元気娘（仮）の問いに答えたのは、横に立っていた青髪ロングヘアの生徒。

整った顔立ちといい、立ち振る舞いやクールな雰囲気と言い『優等

生感』があふれ出ている。

大和撫子……という言葉が当てはまるかもしれない。

……あれ？

この子……どっかで——。

「……」

優等生（仮）は東條を見た後、俺を見て……言葉を止めた。

俺を見て……驚いたような表情を浮かべている。

……え、なに？ もしかして俺のこと知らないパターン？

『やべえ分かんねえこいつ誰？』って顔？

いや、まあ別に全然問題ないんだけど……。

「……海未ちゃん？」

ほう、この優等生は海未ちゃんといいのか。

その海未ちゃんとは、元気っ娘に生を呼ばれてハツとした。

「あつ、い、いえ……。その、書記の方……だったと思います」

おお……！

良かった、ちゃんと覚えられてた……！ 昴君感動。

海未ちゃんはその後も俺をチラッと見たが、偶然俺も見えていたため

目が合ってしまった。

そして彼女に凄まじい速さで目を逸らされる。

うわ……なに今の結構しんどい。出会って数秒でもう嫌われたの

かよ俺。

「南さん」

「は、はいー」

会長の呼び声に最後の一人が反応する。

南ということは……この子が理事長の娘……？

ええ……なにこの子……。

——めっちゃ可愛いんですけど。

可愛い顔立ちにパツチリお目々、全身から漂う『可愛い』オー

ラ。

素晴らしい可愛い娘さんでした。

「あなた確か、理事長の娘よね？」

変なことばかり考えている俺と比べて、会長はしっかり聞きたいことを聞いている。

「は、はい……そうですけど……」

「理事長、廃校についてなにか言っていないかった？」

南さんは申し訳なさそうに顔を伏せ、左右に首を振った。

「いえ……私も今朝知ったばかりなので……」

そりやそう……か。

いくら娘といえど学院の生徒の一人。

不平等な扱いはしないよなあ……。

となるとやはり、廃校については全生徒が今朝知ったということだ。

突然すぎますよ……理事長。

「……そう、ありがとう」

素っ気なく返事をする、会長はこの場から立ち去ろうとする。

「あ、あの……！」

そんな会長を、中央に立っていた元気っ娘が呼び止めた。

「なにかしら？」

足を止め、会長は彼女たちに顔を向ける。

元気っ娘は真剣な表情で……会長に言葉を投げた。

「本当に……学校、無くなっちゃうんですか？」

突然の廃校に戸惑っているのは俺達だけじゃない。

後輩たちも……同様なのだ。

皆、なにかしらの理由があつてこの学院に通っている。

この学院が好きだから、制服が可愛いから、家から近いからなどなど……理由は人によってそれぞれあるだろう。

しかし、この学院が嫌いに通っているという生徒はいないはずだ。

みんな……なにかしら学院に対して『好きだ』と思う部分はあるだろう。

そんな『好き』が突然取り上げられてしまうんだ……。

戸惑わないはずがない。

会長には、後輩を少しでも安心させるようなことを言って欲しいが

……。

俺は心配な気持ちを抱えて会長を見る。

「……あなたたちが心配するようなことじゃないわ」

いやお前……マジで……。

最後まで素っ気なく言葉を返し、立ち去っていく会長。

「ほなまたねー」

東條もなにも言うことなく会長についていく。

俺は――。

「はあ……まったくあの人は……」

あまりの素っ気なさにその場で溜息をついた。

それにより後輩たちから視線が集まる。

俺は立ち去っていく会長の背中を見ながら、言葉を続ける。

「悪いな、あの人あんただけど……悪いやつじゃないんだ。むしろ

……誰よりも焦っているんだと思う」

「焦って……？」

南さんの問いかけに俺は頷く。

「あの人、ここの生徒の中で一番この学院が大好きなんだよ。だから

こそその焦り……かな」

三人はみんな……不安そうな表情をしている。

不安な気持ちは……一緒だよな。

俺は会長から彼女たちに視線を移す。

「一つ、聞いてもいいか？」

「あ、はい！」

元気っ娘が頷く。

俺が先輩だということもあり、まだ彼女たちはぎこちない様子だ。

まあそれもそうか……そもそも話したことすらなかったのに。

俺はそんな彼女たちを見て小さく笑い、質問を投げかける。

「この学院……好きか？」

「好きですー！」

即答。

自信満々に言う彼女の瞳は真つすぐだった。

「そっか。他の二人は？」

元氣っ娘を除く二人も同様に頷いた。

「私も好きです！」

「私も……二人と同じです」

迷いのない……その言葉。

俺は思わず、嬉しくて笑みがこぼれた。

学院のことを迷いなく好きだなんて言える生徒がいるなんて……。

俺は三人の言葉に「ありがとう」と頷いた。

「俺達生徒会も、やれることはどんどんやっていく……と思う」

会長次第だけど。

「それでも俺達だけじゃ限界はある。詰まって……前に進めなくなる可能性もある」

会長は当然諦めていないはずだ。

生徒数を増やすために……色々考えるだろう。

それでも……一人の力では限界がある。

俺と東條がいても……それは変わらない。

だから。

「だから、思いついた時でいい。なにか廃校を阻止するために出来そうなことがあるば……やりたいことがあるば、教えてもらえると助かる」

学院の想う気持ちは、この達もきつと会長と同じはずだ。

学院のためになにかしたい……という気持ちはあれば、それを無下になんてしたくない。

「やりたいこと……ですか？」

「おうよ、別になんでもいいぞ。……あ、でもそれであの会長が納得するかどうかは別の話だけどな？」

あの会長のことだ。

大した案じゃなかったら――。

『却下。こんな下らないことを考える暇があったら将来のために勉強したらどう？』とか言いそう。

なんか会長の言いそうなことがどんどん分かってしまうあたり怖

いわ俺。

「わ、分かりました！」

「んじゃ、俺はそろそろ行くわ。お昼なのに邪魔して悪かったな」
俺は手をヒラヒラつと振り、立ち去ろうとする。

「あ、あの……！」

会長の時と同様、元気っ娘が俺を呼び止める。

「先輩の、その……お名前を教えてもらってもいいでしょうか！」

——あ、やっぱり俺のこと一切知らなかった感じね……。

別にいいんだけどさ……。

俺はニカツと笑い、彼女たちに名前を告げた。

「笠昂。またなにかで会う時があったら……その時はよろしくな」

「はい！　ありがとうござました昂先輩！」

いきなり名前呼びだと——!?

さてはこの子……コミュ力の化物だな……!?

にしても昂先輩……か。

昂……先輩。

——ふっふっふ、悪くないじゃないの。

「笠……昂……先輩。やはり……」

#

『——というわけで、突然の廃校。

初めてあの張り紙を見たとき……本当に驚いた。

いや、むしろ驚かないやつなんていないだろう。

会長も会長で……どこか焦っているようにも見えたし。

当面の間、生徒会活動は廃校問題について重点的に話しそうだな
……。

なんかいつもより更に雰囲気重くなりそうだ……考えるだけで
もしんどい。

そして……あの三人組との出会い。

本当だったらあの時、俺も会長と一緒にすぐその場から離れるつもりだった。

だけどなぜか……彼女たちに話を聞いてみたいと、想いを聞いてみたいと思っただ。

理由は分からない……分からないけど……。

彼女たちの存在が、想いが……今後の鍵となるかもしれない。

そう……思っただ。

……アレだな、最近の俺スピリチュアルパワー全開だな。

理由は分からない。だけどそんな感じがする……っていうのが多いなあ……。

しかし！事実なのだから仕方ない！

まあそんなこんなで、本日の議事録とする。

最高にでかいこの壁を……乗り換えられると信じて。

×月○日

生徒会書記：篁昂』

議題2 新たな風

『なにしてんだ、こんなところに一人で』

夕方、昔からよく知っている公園にやってきた俺は、ベンチに腰掛ける一人の女子に声をかけた。

制服的に……中学生くらいだろうか？

だとしたら俺と大体同じ年くらいか。

ベンチに座り俯いているその女子は、その長い髪の毛のせいによく顔が見えない。

どんな顔をしているのか。

どんな表情をしているのか。

なにを考えているのか。

よく分からない。

俺は彼女と距離を離して隣に座った。

俯く彼女とは反対に、背もたれにグタツと寄りかかり天を仰ぐ。

『……』

少女はなにも返事をしない。

まあ……それも当然か。

突然よく知らない男に声をかけられてホイホイ返事をする女子なんてなかなかいないだろう。

下手したら通報レベルだ。

とはいえ俺は、別にナンパ目的で彼女に話しかけたわけではない。

しつかりとした理由があるのだ。

『……この公園、俺もよく来るんだよ』

この公園にやってきたのは一度や二度じゃない。

元々何度も来ていたが、最近は特に頻繁に来ている。

未だに返事をしない彼女に俺は言葉を続ける。

『ここにきて、このベンチに座って……こうして意味もなくボーっとしてる』

俺がどうして彼女に声をかけたのか。

それは単純に、俺以外の誰かがこのベンチに座っているのが珍しい

からだった。

もちろん公園である以上、いろいろな人が遊びに来るだろうし、ベンチだつて当たり前のように利用するはずだ。

しかし、この時間帯……夕方にこのベンチに座っている人を見かけたことは全然ないのだ。

この公園自体そんなに目立った場所にあるわけではないため、利用者が少ないから余計に驚いた。

とはいえ別に座っていること自体は全然問題ないのだ。ただ俺が気になったのは――。

『……』

彼女は纏うその暗い雰囲気だつた。

とても公園に遊びにきたとは思えないその雰囲気……。

俺は……どこか親近感を感じてしまったのだろう。

でなければ……知らない女子にいきなり話しかけるといふリスキーな行為ができるはずない。

『……だんまりか。まあ……俺には関係ないけど』

俺の質問に答える気がないことが分かった俺は、小さく息をつく。

どうせこうして会うのは今日だけだ。

明日になつたらいないだろうし、当然お互い知らない関係である以上話しかけ続ける理由はまったくくない。

俺はこれ以降彼女に話しかけることをやめ、ボーっと夕暮れの空を眺めていた。

誰もいない公園。

静かで……涼しい風が俺たちを包み込む。

『……』

これが俺と――。

顔の分らない彼女との出会いだつた。

#

「――くん。篁くん」

俺を呼ぶ声が聞こえたことでハツとする。

その声の主に視線を向けると、前に立っている東條が心配そうな表

情で俺を見ていた。

俺は軽く頭を振り思考を切り替える。

「あ……悪い悪い。ちよつと考えごととしてた」

「まったく……ポーつとするのは顔だけにしてちようだい」

「え？ 顔がかつこいいって？」

「幸せな耳を持つているようで羨ましいわ……」

東條の隣に立つ会長が呆れて溜息をつく。

なんか会長つて俺と話するとき絶対に溜息つくよね。なんでだろう。

不思議。

俺たちのやり取りを聞いていた東條が小さく笑い、視線を正面に戻す。

そのあとに続いて俺たち眼前に広がる『扉』を見た。

『理事長室』――。

そう書かれたプレートが扉に張り付けられていた。

俺たちは今……理事長室の前に立っていた。

「まさか……理事長室に乗り込むなんてなあ。さすがは我らが会長様だ」

ポリポリと頬を掻き俺は呟く。

事の発端は簡単だ。

昨日、理事長の娘さんたちと話して収穫を得ることができなかった俺たち。

そして今日、我らが会長絢瀬絵里は言ったのだ。

――『直接理事長に話を聞きにいくわ』……と。

さすがに放っておけないと思い、俺と東條もこうして同行している……というわけだ。

会長のことだから、一人で行かせたらヒートアップして大変なことになりそうなもの。

それに俺自身、理事長から話を聞きたいという気持ちもあるし。

「茶化さないで。こうするしかないから仕方ないじゃない」

「……ま、それもそうだな。あー緊張する」

理事長なんて普段滅多に話さないから……。

俺の言葉を聞いて東條がニヤリと笑みを浮かべた。

あ……嫌な予感するこれ……。

「理事長すごく綺麗やからね。篁くんは緊張するよね？」

「……否定はしない」

「……うわ」

「はいその金髪ポニーテール。思っても『うわ』とか口に出さないようにしなさい」

しかも本気でドン引きの表情だし。

「変なこと言っていないでいい加減入るわよ」

「そうだよ篁くん。おふざけはここまでや」

いや元はといえばお前らが……。

なんて言っても絶対に意味ないから言わない。昴君偉い。

しかし東條の言った通り、ふざけていられるのもここまだ。

これから理事長と話をしようというのだ。変なところを見せるわけにはいかない。

「……行くわよ」

会長は眩き、理事長室のドアをノックする。

『はい』

扉の向こうから聞こえてきた大人の女性の声。理事長の声だ。

「失礼します」

会長は凜とした声で言うと、ゆっくりと扉を開けた――。

さて……話を聞かせてもらおうじゃないの。

音ノ木坂学園……理事長さん。

#

「――というわけで、我々生徒会も学校存続のためにいろいろ活動したいと考えております」

俺たちの前の座る美人な女性。

彼女こそ昨日話した後輩の母親である理事長。

スーツをバッチリ着こなし、『できる女性』感に溢れる理事長。

いつも余裕を持っているこの雰囲気は正に大人の女性だ。

……無理無理。目合わせられないわ。

なんかもう目合っただけで大人の魅力にあてられて好きになっ
ちやいそう。

昴君マジ純情。

——なんて馬鹿なことを考えている一方で、会長は改めて廃校の件
に関して自分の気持ちも告げた。

このまま黙って廃校を待つことはできない。廃校阻止ができるの
なら、自分たちにできることを精一杯やりたい……と。

「……そうですか」

理事長は会長の言葉を静かに聞いている。

「それと、廃校発表の用紙にはこう書かれていました。『入学希望者が
定員を下回った場合、廃校を決定せざるを得ない』……と」

「つまり、定員を下回らなければ廃校ではなくなる……ということだ
すよね？」

会長と東條の言葉。

たしかにそう書かれていたし、つまり入学希望者がたくさんいれば
廃校ではなくなる……ということだろう。

とはいえ——。

「……たしかにその通りです。ですが、生徒が簡単に集まらないから
こそこのような決定になったのです」

理事長の言っていることも正論なのだ。

俺たちみたいなただの生徒より、理事長の方がこの学園の現状を遥
かに理解している。

理解しているからこそ……このような状況になったのだろう。

なんとかできるのなら……問題はとつくに解決されているはずだ。

理事長は会長を見据えて穏やかな口調で尋ねる。

「それとも……なにか良い方法があるのですか？」

「それは……」

理事長に質問に対して俺たちは答えられない。

俺たち自身……どうすればいいのか分からないのだ。

入学希望者を増やすなんて……口では簡単に言えるが現実には甘く
ない。

「思い付きで行動しても……簡単に状況は変わりません。生徒会は、今いる生徒たちのことを考えて行動するべきです」

「で、ですが！…このままなにもしないとこのわけには——」

「会長」

「っ……」

予想通り。

俺はヒートアップした会長を止める。

このままでは余計なことも言いかねない。

俺に止められたことで会長は大人しく引き下がった。

「……ありがとう、絢瀬さん。その気持ちだけ……ありがたく受け取っておきます」

最後まで穏やかに……そして優しく理事長は言う。

気持ちだけ……か。

会長も言いたいことはなにも間違っていない。

そして理事長の言っていることも間違っていない。

廃校を阻止できるのならできるに越したことはない。

しかしそれで今の生徒たちを放って、勝手に自分たちでアレコレする……というのもおかしいだろう。

理事長の言う通り、生徒会として大切なのは今この学園に在籍している生徒たちをサポートすることだ。

会長も……理事長……なにもおかしいことを言っていない。

どちらも正しいからこそ……余計に難しい問題なのだ。

「……失礼しました」

未だに納得ができていないであろうその表情——。

会長は小さく頭を下げると、俺たちを置いたまま理事長室から出ていった。

俺と東條は顔を見合わせて小さく頷く。

「失礼しました」

俺たちも会長と同様に頭を下げ、理事長室から出た——。

#

「まあ……予想通りといえば予想通り……だな」

理事長室での一件後、俺たち三人は生徒会長室に戻ってきた。それぞれいつもの席に座り、なんともいえない気持ちを抱いている。

「そういえば東條、少し戻ってくるのが遅かったけどなにかあったのか?」

正面に座る東條に、何気なく話しかける。

しかし当の本人は話しかけられて驚いた様子を見せた。

「……篁くん、女の子にそういうこと聞いちゃう?」

「……え?」

「……。」

あ。

「……わ、悪い。別にそういうつもりじゃ——」

そんな気まずい表情を浮かべる俺を見て東條が笑った。

「ふふ、冗談や。ちよつと寄り道してただけ」

「お、お前……! 純情な男子高校生を弄んで楽しいのか!」

「もちろん。篁くんやからね」

なんだこの小悪魔女子。

みんな分かる? こうして世の女子高生たちは純情な男たちを騙すんですよ!

いったい何人の男が騙されて来たことか……!

よろしくない! 実によろしくない!

「……純情?」

「ずっと黙ってたのにそだけ反応するのやめてくれませんか? 俺被害者ですからね?」

『こいつなに言ってるの』と言わんばかりに俺を見る会長。

深刻そうな顔をしていたから気を使って話しかけなかったのに……!

「まったく……あなたのせいで静かに考えごともできないわよ」

こめかみに手を当て、やれやれと頭を振る。

「……え? なんで俺が悪いみたいになってるのこれ。」

納得いかないでここは悪ノリするでしょう。

「まあたしかに俺みたいなイケメンがいたらドキドキして考えごとどころじゃ——」

「はいはいかつこいいかつこいい」

「雑っ!!!」

「……水谷くんはかつこいい……と思うよ、うん」

「目逸らすくらいなら最初から言うな!」

なるほど。これが理不尽か。

会長はまた呆れて溜息をついているし、東條は楽しそうにニコニコしている。

まったくこの女子たちは……。

——それにしても。

東條はどこに寄り道していたのだろうか？

一緒に生徒会室に向かって歩いていたはずなのに、気が付いたらいなくなっていたし。

なにか面白いものでも見つけたのだろうか。

東條のことだ……恐ろしくなにかあるのだろう。

うーむ……東條ってなに考えているかよく分からないからなあ……。

俺が一人で唸りながら考えていたとき——。

コンコン——と、生徒会室の扉がノックされた。

突然の来客に俺たちは顔を合わせ、会長は小さく咳払いをする。

珍しいな……最近こうして誰かが生徒会室に訪ねてくることはなかったのに……。

「どうぞ」

『失礼しますー!』

会長の言葉に対して、扉の向こうから聞こえてきた元気な女子生徒の声。

あれ……この声ってたしか……。

扉が開かれた次の瞬間、俺の疑問は確信に変わる。

やっぱり——。

「あなたたちは……」

やってきたのは昨日、俺たちが昼休みに話した三人の後輩たちだった――。

#

突然やってきた三人の後輩。

そして、彼女たちが生徒会長……絢瀬絵里に渡した一枚の用紙。

『新規部活動申請書』――。

どうやら彼女たちは新しい部活動の許可を得るため、ここにやってきたらしい。

高坂穂乃果^{こうさかほのか}。

南ことり。

^{そのだ}園田海未。

それが三人の名前だった。

それにしても新しい部活か……。

それも昨日の今日でこう来るとはな……。

正直驚いた。

それも――。

「アイドル部の設立の申請書です！」

中央に立つ高坂穂乃果は元気よく告げる。

まさかアイドル部と来るとはな……。

アイドル……か。

その言葉を聞いて一人の女子生徒が脳裏を過る。

「それは見れば分かります」

淡々と会長は言葉を返す。

昨日も思ってたけど、なんでこの人他の生徒には冷たい感じで接する

の？ 怖いよ？

「それじゃあ認めていただけますね!」

「いいえ」

嬉々として尋ねる高坂に即答する会長。

いやまあ……この場合は間違ったことは言っていないんだけど……。

だとしても少し言い方を変えても良くない……??

「部活は同好会でも最低五人は必要なのよ」

「えっ！」

高坂は会長の言葉に驚いた。

部活動の設立には最低5人以上必要——。

これは校則で決まっていることだ。

といっても俺も知ったのは生徒会に入ってからだけど。」

「ですが、部員が五人以下の部活動も存在すると聞いています」

「設立時は五人以上だったはずよ」

ロングヘア—の女子生徒……園田の質問にも会長は淡々と返す。

最初こそ五人以上でも、部員が辞めていって五人以下になった部活もあるのだろう。

まあ俺は部活動に所属する気ゼロだから全然詳しくけど。

そもそもこの学園に存在している部活動の数ってどれくらいなのだろうか。まったく分からん。

……これ会長に言ったら死ぬほど呆れられそう。

「あと二人……やね」

優しい口調で東條が言う。会長との温度差がすごい。

でもこればかりは校則だから仕方ない。俺たちがどうこうできる問題ではないのだ。

「あと二人……分かりました。行こう、二人とも」

うむうむ。頑張れ頑張れ。

高坂は東條に言葉に頷き、俺たちに背を向けた。

ふと、三人の一人……園田海未と目が合う。

……え、なに？　もしかして俺のかっこよさに惚れ——。

「……」

はい一瞬で逸らされました。僕の勘違いでしたごめんなさい。

こうも一方的に目を逸らされるとそれはそれでしんどいな……。別に関わりがない相手だから問題はないんだけど……。

——ま、ともかくこの件は一先ず終わりかな。

なんて思っていると……。

「——待ちなさい」

会長が呼び止めたことで、三人は足を止めてこちらを向いた。俺も驚いて会長に視線を向ける。

いったい突然どうしたのだろうか？

「どうしてこの時期に突然アイドル部を始めるの？ あなたたち二年生でしょ？」

なるほど。

それはたしかに俺も同じことを思った。

ここは一旦大人しく聞いていることにしよう。

「私たち、廃校を阻止したいんです！ スクールアイドルって今すごい人気があるんですよ！ だから私は——」

スクールアイドル。

その言葉を聞いて会長の目がスツと細まる。

そして……高坂の言葉を遮り冷たく言い放った。

「だったら……例えば五人集めてきても認めるわけにはいかないわね……。」

「ど、どうしてですか!？」

「……部活は、生徒のためにやるものじゃない。思い付きで行動しても、状況は変えられないわ」

不穏な空気が生徒会室を包み込む。

チラツと東條を見してみるが、彼女は目をつぶったまま穏やかな表情を浮かべていた。

まるで彼女たちがここに来て、会長が冷たく突き返すことが分かっていたかのように……。

東條……お前……。

「変なことを考えてないで、残り二年……自分のためになにをするべきなのかをよく考えなさい」

最後まで一方的に突き放す会長。

しかし会長の言っていることはなにも間違っていない。

スクールアイドル活動で入部希望者を集めるなんて……非現実的すぎる。

彼女たちは素人で、アイドル経験なんてないだろう。

それでアイドル活動をして、注目を集めることで入部希望者が増える……なんてことはありえるのか？

——答えは限りなくゼロだ。だけど。

限りなくゼロだとしても——。

「……」

俺は……たしかに感じたんだ。

高坂の瞳から伝わる強い『想い』。

そして——。

三人から伝わった不思議な『予感』。

根拠なんてない。理由なんてない。

それでも俺は——。

彼女たちならもしかしたら——。

そう……思っただ。

#

『立ちはだかる廃校と名の壁。』

なにをするべきなのか、どうすればいいのか……。

このときの俺は……俺たちは全然分かっていなかった。

廃校を阻止したい。しかし具体的な方法が分からない。

そしてそんな俺たちの前に現れた、彼女たち。

正直驚いた。今になって新しい部活動を……それもスクールアイ

ドルだぞ？

それで廃校を阻止なんて……とんでもないことを考える連中だ

なあつて心底思った。

それと同時に……どこかワクワクしたんだ。

こいつらならもしかして……ってな。

どうしてそう思ったのかは分からない。なぜそう感じたのかは分からない。

ともあれ、俺も俺でやるべきことがある。

会長の様子も心配だしな……本人には絶対に言えないけど。

俺は俺なりに、生徒会として……一人の生徒として動くだけだ。

こんな感じで以上！ 本日の議事録！ 終わり！
……今日はちよつと真面目なこと書いたな俺。

×月○日

生徒会書記：篁昂』